

体験版目次

一章 パパと娘の事情 03

二章 危険なシャワー 08

パパと娘のエッチ生活　く愛する娘とらぶらぶえっちく（体験版）

一章　パパと娘の事情

「パパー！」

田舎の児童公園。

既に殆ど整備されていない遊具に掴まりながら、彼女は楽しそうに俺のことを呼んでいた。

荒い息を吐きながら、彼女の傍に近づいていく。

俺が近付くとその子は嬉しそうに、俺を見上げながら太陽のような笑顔を浮かべていた。

「パパ、遅いよ」

「ごめんごめん。萌花《もか》は元気だなあ」

「へーっ」

にぱっと音がするような笑顔を見せて、萌花は鉄棒に手を伸ばす。

身長よりも高い鉄棒を掴もうとしたので、慌てて後ろから持ち上げてやる。

萌花の柔らかなお尻の感触と、子供の高い体温が掌に感じられて、俺は心臓が高鳴るのを抑えることができなかった。

「そんな高い鉄棒できるのか？」

「できるよー！ 見ててね！」

萌花は身体を揺すり、勢いをつける。

彼女の黒髪が動きに合わせてさらりと揺れた。

「あれ？ んしょ！ んしょ！」

頑張って身体を持ち上げようとするが、やはり難しいらしい。

戸惑った表情を見せながら、萌花は何度も下半身を浮かせて鉄棒で回ろうと試みていた。

そしてそのたびに、萌花のはいているスカートから白いパンツがちらちらと俺の視界に入ってくる。

自分の娘のパンツなのだから、家で幾らでも見ることができる。その辺りに脱ぎ捨ててあるパンツを洗濯機に放り込み洗ってから畳んであげるのも、俺の仕事の一つだ。それでも、実際に生でパンツをはいている姿を見るとそのときとは違う感情が芽生えてくる。

情欲だ。

俺は実の娘である萌花に、性的な欲望を抱いている。

最低な父親だと自分でも思うが、その気持ちを抱いてしまったのだから仕方がない。何とか隠そうとしているのだが、小学三年生に上がってますます女の子っぽくなってきた萌花の無邪気な行いが、俺の劣情をひたすらに掻き立ててくるのだ。

「あっ！」

「おっと」

萌花が鉄棒から手を離して、地面に落ちそうになるところをキャッチする。

萌花のことだから多分そういうことをすると思っていたので、問題なく受け止めることができた。

彼女の身体を正面からぎゅっと抱きとめると、女の子の甘い香りと柔らかな身体の感触がダイレクトに全身に伝わってきた。

「萌花は軽いなー」

「えへへっ」

年相応のほっそりとした体躯。

確か身長は前回の身体測定のときに、百二十センチぐらいだったはず。

体重も重くはなく、片腕でも充分に持てるほどに軽い。

「パパ、遊ぼうよ！」

「わかったわかった」

今日は仕事が休みなので、萌花を学校まで迎えに行った。

そして買い物を済ませてから、夕飯まで公園に行きたいという彼女の願いを叶えてここにいるというわけだった。

小学三年生ともなれば、友達と遊んだりすることの方を優先しそうなものだが、幸いにも萌花はまだ俺に懐いてくれている。

萌花の母、つまり俺の妻はいない。

離婚したわけではなく、死別だ。萌花が今よりもっと幼い頃だったので、殆ど記憶はないだろう。

それから俺は男で一つで必死に萌花を育ててきた。

その甲斐あつてか、萌花はとても俺に懐いてくれている。多分、普通の親子よりもずっと仲がいい自覚がある。

そして妻がいなくなってしまったことの大きな問題を感じ始めたのがここ数ヶ月のことだった。

元々俺はロリコンだった。

結婚する前は、色々なロリ系の動画や画像を漁っていたこともある。

そんな俺でも妻と出会ってロリコンを卒業することができて、彼女と結婚して子供を授かった。

……実際のところは、卒業などできていなかったのだが。

妻がいなくなり、俺の中のストッパーが外れたのだろう。

次第にロリに対する性欲を隠せないようになってきた。

そして娘である萌花は、俺には不釣り合いなほどに美人だった妻によく似ている。

何度か子供のころのアルバムを見せてもらったが、萌花と妻は瓜二つだった。

そんな彼女に情欲を抱くなという方が無理な話だろう。

そういう理由もあって、俺は自分と戦う日々を過ごしている。

父親失格だとわかっていながら、萌花を手放すことはできない。

だがこのままではいつか決壊する。昨日だって、萌花の写真をオカズにオナニーをしていたぐらいだ。

このまま我慢し続けるか。

いっそ全てを解放し、萌花にぶつけるか。

「パパ？」

最愛の娘が、目の前で首を傾げていた。

「ああ、ごめん。ちよつと考えごとしてたよ」

「もー！今日は萌花と遊ぶ日だよ！」

そんな微笑ましいやり取りをしても、萌花に対する欲望は消えない。

彼女の細い腕や太もも、全く膨らんでいない。ぺったんこな胸や小ぶりの尻。

それらを全力で味わって汚したい。男の欲望を思いっきり娘に叩きつけたいという

欲望は、日に日に大きくなってくる。

そして萌花自身も、無邪気な誘惑で俺の理性を揺さぶってくる。

俺はそんな薄氷の上を渡るような日々を過ごしているのだった。

## 二章 危険なシャワー

「ただいまー！」

俺に先んじて家に入った萌花が、誰もいない部屋の中へ挨拶をする。

俺と萌花が暮らす家は田舎の一軒家で、近所までは結構距離がある。

田舎でのびのびと子育てがしたい、という妻の希望を受けて購入した二階建ての家だが、残念なことに殆どの部屋は使われてはいない。

「萌花、ご飯の前にシャワー浴びなさい」

公園でたっぷり遊んで、砂や泥が身体中についている。部屋の中を歩き回られる前に、シャワーを浴びさせたい。

「パパも一緒にシャワー浴びようよ！」

「パパは夕飯の支度があるから」

萌花はかなりの甘えん坊だ。一緒にお風呂に入ったり、同じ布団で眠りたがる。

いい加減小学三年生ともなれば父親と一緒にそういうことをするのは嫌がりそうなものだが……。

俺としては嫌ではないが、いつ間違いが起こるかかわからずひやひやものだ。



「今はお腹空いてないもん！　パパと一緒に風呂がいい！　身体洗って！」

「……仕方ないなあ」

色々考えていても、萌花の意見には逆らえない。俺は見た目は洪々と了承して、萌花と一緒に風呂場に向かうのだった。

我が家のお風呂場は特別広いわけではないが、萌花が小さいので余裕で二人で入ることができる。

脱衣所で早々に彼女をすっぽんぽんにすると、すりガラスの向こうに追いやった。その瞬間、ちらりと見えたおまんこの縦スジに目を奪われたのは秘密だ。

「シャワー温めといてくれよ」

「うん！　パパも早く！」

「わかったよ」

俺も手早く服を脱ぐ。

一応、勃起はしていない。風呂の中での萌花の行動次第では危ないかも知れないが。

脱衣所と風呂場を隔てるドアを開けて中に入ると、いきなり裸の萌花が俺を出迎える。

手にはシャワーヘッドを持って、両手を広げて全く自分の身体を隠そうともしていなかった。

股間がむくりと反応する。

娘に対しての我慢は既に限界に達しようとしていた。

「シャワー攻撃〜！」

無邪気に素晴らしいながらお湯を掛けてくる。彼女が動かたたびに、ぺったんこの胸や一本の毛も生えていない綺麗な股間のスジが俺を誘惑する。

「ははっ、こちら」

冷静にそういつて、萌花の肩を掴んだ。その細さと柔らかさに性欲を抱き始めたのはいつの話だろうか、そんなどうでもいいことが頭を過ぎる。

「萌花、頭を洗ってあげるよ」

「はい！」

元氣よく答えて風呂場の椅子に座る。

後ろを向いているから今なら大丈夫だ。我慢するのをやめると、俺のちんこは瞬く

間に勃起して、大きな肉の幹となって天井を向いていた。

萌花の頭にお湯をかけ、シャンプーを手取る。

わしゃわしゃと髪を洗っている間、萌花は泡が目に入らないように目を閉じていた。

「パパ？」

「どうした？」

「なんか背中に変なのがある」

まずい。

勃起したちんこの先っぽが、萌花の背中に触れている。

そのふにととした柔らかな感触によって、ちんこは更に大きく勃起してしまっていた。

「気の所為じゃないかな？」

目を閉じている分だけ感覚が鋭敏になっているのだろうか。

萌花はそれがなんであるかを確かめるように身体をぐりぐりと動かして、背中を擦り付けてきた。

「う、おっ……!!」

小学三年生の背中がペニスに擦り付けられる快感。

それを味わったことがある人はこの世界でもわずかしいだろう。しかも、それが愛娘のものであればなおさらだ。

「パパ？」

「なんでもないよ……。萌花、洗いにくいからあんまり動くんじやない」

「えー、でもお」

やはりちんこが気になるのだろう。

剥き出しになった亀頭部分を、萌花の背中が擦る。

そのたびに俺の全身に快感が走り、必死で留めている理性の防波堤が少しずつ削られていくのがわかった。

「こ、こら！」

「えへへっ、パパ変なのー」

俺の反応が面白いのか、萌花が無邪気に背中コキを続けてくる。

びりびりとした快感が全身に伝わり、僅かに残った理性が壊れようとしていた。

いや、もうとつくに壊れていたのだろう。それを何とか下手くそな補修で現状を保って居だけの話だ。

実際のところ、娘に劣情を抱いてしまった時点で最低な父親の烙印を押されること

は間違いない。そんなことは俺もとくに理解している。

だとするのなら、ここで取り繕うことに何の意味があるのだろうか。

俺は最低な父親であることに違いはないというのに。

そう思った瞬間、思考の全てがクリアになった。

萌花もこうしているのだから、俺との行為を求めている。

冷静に考えればそんなわけがない。萌花はただ、無邪気に父親と戯れているだけだ。彼女がこの世界で最も信頼している、血の繋がった父親と。

だが、既に崩れた理性の残骸は濁流のように冷静な思考を押し流す。

後に残った獣欲が、娘に向けられることになった。

「萌花」

「パパ？」

俺の声色が少し硬くなっていることに気付いたのか、萌花の声に怯えが入る。これは無意識だったが、彼女に対して叱るときの声になっていたようだ。

「ほら、シャンプーを流すぞ」

すぐに声を戻して、優しくそう語り掛ける。

「はい！」

萌花も気の所為だと思ったのか、素直に目を閉じてシャワーのお湯を受け入れていた。

「次は身体を洗うからな」

ボディソープを取り出し、手に付ける。いつもならボディタオルを使うところだが、今日は素手だ。直接萌花の身体を味わいたかった。

「ほら、椅子から立って」

「うん」

いつもと違う指示に萌花は戸惑いながらも、いう通りにする。椅子を俺の方に引き寄せて、そこに腰掛ける。

「パパが座るの？」

「そうだよ。萌花は」

萌花の身体を持ち上げる。

小学三年生の体重は軽く、抵抗もなかった。

そして俺の膝の上に載せる。

「わっ！ パパのお膝！」

「こっちの方が洗いやすいからな」

「わーい！」

父親とスキンシップができることが嬉しくて、萌花は素直に喜んでいる。

一方の俺は萌花のおまんこやお尻の感触を膝で味わっていた。

ふにふにですべすべの萌花の肌は吸い付くように気持ちがいい。

「ほら、洗うぞー」

まずは背中に手を這わせる。

「ひゃっ！ パパ、タオルは？」

「手で洗った方が綺麗になるって、テレビで見たんだ」

「そうなんだあ。なんか、くすぐりたい！」

身をくねらせるが、嫌がっている様子はない。

男の性欲に対する本能的な恐怖すら、まだ萌花にはないようだった。純粹に父親として俺を信じ、慕っている萌花の気持ちを裏切っていることすらも、今は快感の材料になっている。

「ほら、萌花。ここはどうだい？」

「んー、くすぐりたい！」

背中から脇を通り、胸の辺りへ。

指先で小さな乳首を弾いてみるが、性感が発達しているわけではないので特に反応はなかった。もう少し色々してあげれば、また違うのかも知れないが。

「パパ、おっぱいばかり洗ってるー！」

萌花の胸を、円を描くように洗っていく。

小学三年生の胸は、全く膨らみがない。ついこの間上がったばかりだから当たり前といえは当たり前だが。

時折ふにととした感触が手に心地よいが、これは胸のふくらみとはまた別の、少女特有の柔らかい肌によるものだろう。

「おっぱいも綺麗にしないとな」

「えっちー！」

何処でそんな言葉を覚えてきたのか、笑いながら萌花がそういった。

言葉とは裏腹に糾弾するような意図はないらしく、胸を洗われ続けても一切の抵抗はない。

萌花の身体をこっちの向かって倒すと、抵抗せずそのまま俺の身体に身を預けた。

斜めになった萌花の胸から、今度はおへその辺りを手でくすぐるように洗う。

「きやはっ！　パパぁ！　くすぐりたい！」



「我慢しなさい」

「きやははっ！ おへそくすぐっちゃだめえ！」

バタバタと暴れる萌花の手足を抑えながら、すべすべのお腹を洗い終える。

「今度は足を開いて」

「はーい！」

女兒のほっそりとした足が開かれると、誰にも犯されていない萌花の子供おまんこが見えた。

ぴつちりと閉じた縦スジは、萌花の性知識と同じように、排泄以外の自分の役割をまだ理解もしていないだろう。

誰も触れたことのないその花園に、俺は容赦なく指で触れた。

「パパ、そこも洗うの？ いつもは自分で洗いなさいっていうのに」

「ここもパパが洗った方がいいらしいんだ。萌花は嫌か？」

「んーん！ パパ、洗って！」

なんて無邪気で可愛い娘なんだろう。

俺の内側に渦巻くどろどろとした欲望も知らず。

彼女の無垢さに全力に答えるために必要なのは、理性を捨てること。ここで立ち止

まることはできない。

このあまりにも神聖な存在を今日、汚して犯して自分のものにしてやる。人差し指ですりすりと、萌花のおまんこを刺激する。

縦スジに沿って優しく、マッサージするような愛撫だ。

スジの中に指先を入れ、萌花の様子を伺いながらそこを刺激していく。

やがて指先が、おまんこのちっちゃな穴に触れた。指を侵入させたくなかったが、今は我慢しよう。

「パパ、変な洗い方」

「ちゃんと綺麗にすると、こうなっちゃうんだ」

適当な言い訳をしながら、萌花の綺麗なおまんこへの刺激を続けていく。

途中、クリトリスを愛撫することも忘れずに。

「んっ」

クリトリスに触れると、萌花が小さく震える。

「痛い？」

「んーん」

ふるふると首を横に振る。

いつの間にか萌花は静かになって、俺の愛撫を受け入れるようになっていた。

「萌花、もっとパパによっかかかって」

「ん」

言葉も少なく、萌花が言われるがままにする。

安定する姿勢にすると、萌花の両足を大きく開かせる。

片手で萌花のおまんこを刺激し、もう片方の手は膨らんでいないおっぱいに。少し力を込めて揉んでも、萌花は何もいわなかった。

「萌花、気持ちいいかい？」

「……んー」

否定とも肯定ともつかない返事が返ってきた。

それでもクリトリスや膣口を優しく撫でてやると、ぴくんと身体を動かして反応する。

萌花はこれが快感だとわかっていないのかも知れない。

だとしたらそれをちゃんと教えてあげるのも、父親としての役目だろう。

「萌花、身体がびくびくしてるぞ」

「んっ」

いいながらクリトリスをちよつと強めに弾く。

萌花は身体を小さく跳ねさせてから、脱力したように俺にもたれかかった。抵抗はなく、されるがままになっている。

「萌花」

今度は乳首を強めに押してみる。

痛くないように、擦り付けるように指先で弄つてやると、萌花の身体から力が抜けていくのがわかった。

「ふわ……パパあ、変なの」

「何が変なんだ？」

「なんかあ、パパにそこいじられるとお……。身体がふわんつてなるう」

「嫌かい？」

「んーん」

「じゃあ、もつとするぞ」

「ん……ふあっ……」

萌花の喘ぎ声ともつかない返事を頼りに、しばらくマッサージを楽しむ。

既にお互いにこれが身体を洗っていることなど忘れたかのように、父と娘の愛撫を

楽しんでいた。

実の娘のおまんこと乳首をいじり、性感を開発している。

その事実が、俺をより興奮させていく。

ちんこはこれ以上にないぐらいに勃起し、萌花の背中にごつごつとあたっていた。俺自身もそんなことが気にならないぐらいに、萌花への愛撫に夢中になっていたのだが。

「パパ！」

急に萌花が声をあげる。

先程までのとろんとした表情とは打って変わって、驚きと焦りが混じったかのように目を見開いていた。

「も、萌花？」

ひょっとしてこれがイケないことだと気づいたのだろうか。

俺の頭の中で幾つかの誤魔化しの言葉が渦を巻くが、どうやら違ったようだ。

「パパのおちんちん、変だよ！」

萌花は俺の膝から立ち上がると、勃起したちんこを指さしながら叫んだ。どうやら視界の端に見えてしまったらしい。失敗したかも知れない。

「あー、萌花、これは……」

「すっごく腫れてるよ？ 怪我したの？」

心配そうな顔で、萌花が覗き込んできた。

その表情を見て、俺はあることを閃く。

「いや、怪我じゃないんだ。ただ、ちよつと病気なんだよ」

「パパ、病気なの……？」

萌花が絶望に満ちた表情で俺を見ている。

「いや、でも大丈夫だよ。痛かったりするわけじゃないんだ」

「そうなの？」

「そうそう。ちよつと身体が熱くなっちゃって、困る病気なんだけど。でもほら、パパは元気だろ？」

安心させるように語り掛ける。

萌花とエッチなことはしたいが、彼女の悪戯に悲しませたいわけではない。

「んー……」

それでも萌花は、心配そうに俺を見ている。やっぱり優しい子だ。

だからこそ、その優しさを利用させてもらう。もう既に俺は最低の父親で、後戻り  
はできないのだから。

「でも、ちよっとだけ苦しいんだ。だから、萌花に協力してほしいんだ」

「協力？」

「そう。この腫れちゃった場所、おちんちん」

「おちんちん……」

「おちんちんに悪いものが溜まっちゃう病気なんだよ。それでね、萌花にはそれを出  
す手伝いをしてほしいんだ」

「悪いの出せば、治るの？」

「治るよ」

「わかった！ どうすればいいの？」

「まずは、萌花の両手で触ってごらん」

いわれるがままに、俺の正面に立って萌花がちんこに手を伸ばす。

「わっ……。おっきいくて熱いね」

自慢ではないが、俺のちんこはかなりデカイ。萌花の母もこれで何度も気持ちよくさせてあげた自慢の逸品だ。

ただ萌花のおまんこには入らないかも知れないので、それがちよつとだけ悔やまれる。大きすぎてもいいことはないのかも知れない。

萌花のちっちゃなおててが、俺のちんこに触れる。

そこからじんわりとした温かい快感が伝わってきて、身体が強張った。

しかも身体を洗っていたから萌花の両手には石鹸が付いていて、それがローションのようにぬるぬると滑りをよくしている。

「うっ、くっ……」

「パパ、大丈夫？」

「大丈夫だよ……。萌花の手が気持ちよくてね」

「気持ちいいの？ 病気のなに？」

「萌花にいっぱい気持ちよくしてもらうと治るんだよ。だから」

「うん！」

俺が言い終えるより早く、萌花は自分が何をすればいいのかを理解してくれたらしい。



「おててで、おちんちんごしごし！ ごしごし！」

少し強めに、萌花が両手でちんこを擦る。

ちっちゃくて可愛い二つの手が、ごつくて醜いペニスを這いまわる姿はあまりにも犯罪的で官能をもたらすものだった。

「ああ、いいよ……萌花、もっと」

「うん！ パパ、ここが気持ちいいの？」

萌花の手が亀頭に添えられる。

「そうだけど、そこは敏感だから優しくね」

「びんかん？」

「強くすると痛いってことだよ」

いわれた通りに、萌花は両手で優しく亀頭を責めてくれる。

小学生のちっちゃな手、自分の娘の手が醜いちんこを気持ちよくさせようと必死で上下に動いている姿を見て、俺の興奮は最高潮に達しようとしていた。

「ん、しょ！ んしょ！ パパ、気持ちいい？」

「ああ、最高だよ……。萌花、もっと強くしてくれ」

「うん！ ん！ ん！ ん！」

出しっぱなしのシャワーの音と、石鹸と俺のカウパーが混じった粘着質な音が風呂場で反響して響き渡る。

その中にあっても、萌花の頑張る可愛らしい声は俺の耳に強く響いていた。

「あ！ あ！ 萌花、萌花！」

「パパ、なあに？」

「そのまま、そのまま擦りなさい！」

「わかった！ んしょ！ んしょ！ パパ、気持ちよくなって！ いっぱい気持ちよくなってね！」

金玉の中で先程から作られ続けていた精子が、尿道を駆けあがっていく。

萌花の奉仕にこれ以上我慢できるわけもなく、俺は壊れたように声をあげながら萌花に性行為の指示を出し続けていた。

「くっ、もう出るから！ 萌花、後ちよっと頑張れ！」

「パパも頑張れ！ 頑張れー！」

「うううっ！」

ぐつぐつとした白いマグマが昇ってくる。

俺はそれを我慢することなく、無垢な娘に向かって解き放った。

「萌花！　でるっ！」

「ふえ……？　ひゃああっ！」

びゅるるるっ！　びゅるうううううううっ！　どくっ！　どくんっ！

ちんこが何度も脈動し、尿道からは灼熱のザーメンが飛び出した。

「パパ、なにこれえ？　おしっこ？」

それらはぼたぼたと萌花の手や顔に容赦なく降りかかり、石鹸と混じって愛する娘を白い欲望に染め上げていく。

「はあ、はあ……」

萌花の質問に答える余裕もない。

小学三年生の娘の手コキが与えてくれた快感は凄まじいもので、全身から力が抜けて荒い息を吐くことしかできなかった。

「なにこれえ？　変な味……」

どうやら少し口の中に入ってしまったらしい。

嫌そうな顔をしているが、そのうち喜んで飲んでもらえるようにしたいものだ。

「萌花、ありがとう。悪いのは全部出たよ」

「そうなの？　あっ！」

萌花が俺のちんこに気付く。

人生最高の射精をした俺のちんこは、既に萎えて下を向いている。

もつともそれは一時的なもので、このまま萌花の裸を見ていたらまたすぐに大きくなってしまうのだが。

「ありがとう、萌花」

頭を撫でてやると、嬉しそうに目を細める。

「どういたしまして！ パパ、病氣治ったの？」

「いや、実はね……まだ治ってないんだ」

「そうなの？」

「今出した白いのがまたすぐに溜まっちゃうんだ。もしそうなったら、また萌花に手伝ってもらってもいいかな？」

俺の質問に対して、萌花は花咲くような笑顔を向けてくれる。

「いいよ！ パパのためなら、萌花頑張るね！」

あまりにも純粋無垢な返事。

愛する娘の献身をこれから全力で汚せるという事実には、萎えかけた俺のちんこは少しづつ硬さを取り戻していくのだった。